

医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会の I F 記載要領 2013 に準拠して作成

食後過血糖改善剤
日本薬局方 ボグリボース錠

ボグリボース錠0.2mg 「NP」
ボグリボース錠0.3mg 「NP」

VOGLIBOSE TABLETS

剤形	錠剤（素錠）
製剤の規制区分	処方箋医薬品（注意－医師等の処方箋により使用すること）
規格・含量	ボグリボース錠 0.2mg 「NP」 1錠中 日本薬局方 ボグリボース 0.2mg ボグリボース錠 0.3mg 「NP」 1錠中 日本薬局方 ボグリボース 0.3mg
一般名	和名：ボグリボース（JAN） 洋名：Voglibose（JAN）
製造販売承認年月日 薬価基準収載・発売年月日	製造販売承認年月日：2006年 3月 15日 薬価基準収載年月日：2006年 7月 7日 発売年月日：2006年 7月 19日
開発・製造販売（輸入）・ 提携・販売会社名	製造販売：ニプロ株式会社
医薬情報担当者の連絡先	
問い合わせ窓口	ニプロ株式会社 医薬品情報室 TEL:0120-226-898 FAX:06-6375-0177 医療関係者向けホームページ https://www.nipro.co.jp/

本 I F は 2019 年 9 月改訂の添付文書の記載に基づき改訂した。

最新の添付文書情報は、PMDA ホームページ「医薬品に関する情報」

<https://www.pmda.go.jp/safety/info-services/drugs/0001.html> にてご確認ください。

I F利用の手引きの概要 ―日本病院薬剤師会―

1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として医療用医薬品添付文書（以下、添付文書と略す）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合がある。

医療現場では、当該医薬品について製薬企業の医薬情報担当者等に情報の追加請求や質疑をして情報を補完して対処してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための情報リストとしてインタビューフォームが誕生した。

昭和63年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬と略す）学術第2小委員会が「医薬品インタビューフォーム」（以下、I Fと略す）の位置付け並びにI F記載様式を策定した。その後、医療従事者向け並びに患者向け医薬品情報ニーズの変化を受けて、平成10年9月に日病薬学術第3小委員会においてI F記載要領の改訂が行われた。

更に10年が経過し、医薬品情報の創り手である製薬企業、使い手である医療現場の薬剤師、双方にとって薬事・医療環境は大きく変化したことを受けて、平成20年9月に日病薬医薬情報委員会においてI F記載要領2008が策定された。

I F記載要領2008では、I Fを紙媒体の冊子として提供する方式から、PDF等の電磁的データとして提供すること（e-I F）が原則となった。この変更にあわせて、添付文書において「効能・効果の追加」、「警告・禁忌・重要な基本的注意の改訂」などの改訂があった場合に、改訂の根拠データを追加した最新版のe-I Fが提供されることとなった。

最新版のe-I Fは、（独）医薬品医療機器総合機構の医薬品情報提供ホームページ（<https://www.info.pmda.go.jp/>）から一括して入手可能となっている。日本病院薬剤師会では、e-I Fを掲載する医薬品情報提供ホームページが公的サイトであることに配慮して、薬価基準収載にあわせてe-I Fの情報を検討する組織を設置して、個々のI Fが添付文書を補完する適正使用情報として適切か審査・検討することとした。

2008年より年4回のインタビューフォーム検討会を開催した中で指摘してきた事項を再評価し、製薬企業にとっても、医師・薬剤師等にとっても、効率の良い情報源とすることを考えた。そこで今般、I F記載要領の一部改訂を行いI F記載要領2013として公表する運びとなった。

2. I Fとは

I Fは「添付文書等の情報を補完し、薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製薬企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

ただし、薬事法・製薬企業機密等に関わるもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師自らが評価・判断・提供すべき事項等はI Fの記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供されたI Fは、薬剤師自らが評価・判断・臨床適応するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。

【I Fの様式】

- ①規格はA4版、横書きとし、原則として9ポイント以上の字体（図表は除く）で記載し、一色刷りとする。ただし、添付文書で赤枠・赤字を用いた場合には、電子媒体ではこれに従うものとする。
- ②I F記載要領に基づき作成し、各項目名はゴシック体で記載する。

- ③表紙の記載は統一し、表紙に続けて日病薬作成の「I F利用の手引きの概要」の全文を記載するものとし、2頁にまとめる。

[I Fの作成]

- ①I Fは原則として製剤の投与経路別（内用剤，注射剤，外用剤）に作成される。
- ②I Fに記載する項目及び配列は日病薬が策定したI F記載要領に準拠する。
- ③添付文書の内容を補完するとのI Fの主旨に沿って必要な情報が記載される。
- ④製薬企業の機密等に関するもの，製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師をはじめ医療従事者自らが評価・判断・提供すべき事項については記載されない。
- ⑤「医薬品インタビューフォーム記載要領2013」（以下，「I F記載要領2013」と略す）により作成されたI Fは，電子媒体での提供を基本とし，必要に応じて薬剤師が電子媒体（PDF）から印刷して使用する。企業での製本は必須ではない。

[I Fの発行]

- ①「I F記載要領2013」は，平成25年10月以降に承認された新医薬品から適用となる。
- ②上記以外の医薬品については，「I F記載要領2013」による作成・提供は強制されるものではない。
- ③使用上の注意の改訂，再審査結果又は再評価結果（臨床再評価）が公表された時点並びに適応症の拡大等がなされ，記載すべき内容が大きく変わった場合にはI Fが改訂される。

3. I Fの利用にあたって

「I F記載要領2013」においては，PDFファイルによる電子媒体での提供を基本としている。情報を利用する薬剤師は，電子媒体から印刷して利用することが原則である。

電子媒体のI Fについては，医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従って作成・提供するが，I Fの原点を踏まえ，医療現場に不足している情報やI F作成時に記載し難い情報等については製薬企業のMR等へのインタビューにより薬剤師等自らが内容を充実させ，I Fの利用性を高める必要がある。また，随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては，I Fが改訂されるまでの間は，当該医薬品の製薬企業が提供する添付文書やお知らせ文書等，あるいは医薬品医療機器情報配信サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに，I Fの使用にあたっては，最新の添付文書を医薬品医療機器情報提供ホームページで確認する。

なお，適正使用や安全性の確保の点から記載されている「臨床成績」や「主な外国での発売状況」に関する項目等は承認事項に関わることもあり，その取扱いには十分留意すべきである。

4. 利用に際しての留意点

I Fを薬剤師等の日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用して頂きたい。しかし，薬事法や医療用医薬品プロモーションコード等による規制により，製薬企業が医薬品情報として提供できる範囲には自ずと限界がある。I Fは日病薬の記載要領を受けて，当該医薬品の製薬企業が作成・提供するものであることから，記載・表現には制約を受けざるを得ないことを認識しておかなければならない。

また製薬企業は，I Fがあくまでも添付文書を補完する情報資材であり，インターネットでの公開等も踏まえ，薬事法上の広告規制に抵触しないよう留意し作成されていることを理解して情報を活用する必要がある。

(2013年4月改訂)

目 次

I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯 1
2. 製品の治療学的・製剤学的特性 1

II. 名称に関する項目

1. 販売名 2
2. 一般名 2
3. 構造式又は示性式 2
4. 分子式及び分子量 2
5. 化学名（命名法） 2
6. 慣用名，別名，略号，記号番号 2
7. CAS 登録番号 2

III. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質 3
2. 有効成分の各種条件下における安定性 3
3. 有効成分の確認試験法 3
4. 有効成分の定量法 3

IV. 製剤に関する項目

1. 剤形 4
2. 製剤の組成 4
3. 懸濁剤，乳剤の分散性に対する注意 5
4. 製剤の各種条件下における安定性 5
5. 調製法及び溶解後の安定性 7
6. 他剤との配合変化（物理化学的変化） 7
7. 溶出性 7
8. 生物学的試験法 11
9. 製剤中の有効成分の確認試験法 11
10. 製剤中の有効成分の定量法 11
11. 力価 11
12. 混入する可能性のある夾雑物 11
13. 注意が必要な容器・外観が特殊な容器に関する情報 11
14. その他 11

V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果 12
2. 用法及び用量 12
3. 臨床成績 12

VI. 薬効薬理に関する項目

1. 薬理学的に関連ある化合物又は化合物群 14
2. 薬理作用 14

VII. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移・測定法 16
2. 薬物速度論的パラメータ 16
3. 吸収 16
4. 分布 17
5. 代謝 17
6. 排泄 17
7. トランスポーターに関する情報 17
8. 透析等による除去率 18

VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

1. 警告内容とその理由 19
2. 禁忌内容とその理由（原則禁忌を含む） 19
3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由 19
4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由 19
5. 慎重投与内容とその理由 19
6. 重要な基本的注意とその理由及び
処置方法 20
7. 相互作用 20
8. 副作用 21
9. 高齢者への投与 22
10. 妊婦，産婦，授乳婦等への投与 23
11. 小児等への投与 23
12. 臨床検査結果に及ぼす影響 23
13. 過量投与 23
14. 適用上の注意 23
15. その他の注意 23
16. その他 23

IX. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験 24
2. 毒性試験 24

X. 管理的事項に関する項目		14. 再審査期間	26
1. 規制区分	25	15. 投薬期間制限医薬品に関する情報	26
2. 有効期間又は使用期限	25	16. 各種コード	27
3. 貯法・保存条件	25	17. 保険給付上の注意	27
4. 薬剤取扱い上の注意点	25	XI. 文献	
5. 承認条件等	25	1. 引用文献	28
6. 包装	25	2. その他の参考文献	28
7. 容器の材質	25	XII. 参考資料	
8. 同一成分・同効薬	26	1. 主な外国での発売状況	29
9. 国際誕生年月日	26	2. 海外における臨床支援情報	29
10. 製造販売承認年月日及び承認番号	26	XIII. 備考	
11. 薬価基準収載年月日	26	1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うに あたっての参考情報	30
12. 効能又は効果追加，用法及び用量変更 追加等の年月日及びその内容	26	2. その他の関連資料	31
13. 再審査結果，再評価結果公表年月日及び その内容	26		

I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯

ボグリボースは、本邦で開発された食後過血糖改善剤であり、1994年に上市されている。

1錠中にボグリボースをそれぞれ0.2mg及び0.3mg含有するボグリボース錠0.2mg「NP」及びボグリボース錠0.3mg「NP」は、ニプロファーマ(株)が後発医薬品として開発を企画し、医薬発第481号(平成11年4月8日)に基づき規格及び試験方法を設定、加速試験、生物学的同等性試験を実施し、2006年3月に承認を取得、2006年7月に販売を開始した。2014年2月には、製造販売承認をニプロ(株)が承継した。

2. 製品の治療学的・製剤学的特性

○本剤は、腸管において、二糖類から単糖類への分解を担う二糖類水解酵素(α-グルコシダーゼ)を阻害することによって、糖質の消化・吸収を遅延させ、食後過血糖を改善する。¹⁾

○臨床的には、糖尿病の食後過血糖の改善(ただし、食事療法・運動療法を行っている患者で十分な効果が得られない場合、又は食事療法・運動療法に加えて経口血糖降下剤若しくはインスリン製剤を使用している患者で十分な効果が得られない場合に限る)、耐糖能異常における2型糖尿病の発症抑制(錠0.2mgのみ)(ただし、食事療法・運動療法を十分に行っても改善されない場合に限る)に有用性が認められている。

○重大な副作用としては、低血糖、腸閉塞、劇症肝炎、重篤な肝機能障害、黄疸、意識障害があらわれることがある(頻度不明)。

Ⅱ. 名称に関する項目

1. 販売名

(1) 和 名 : ボグリボース錠 0.2mg 「NP」
ボグリボース錠 0.3mg 「NP」

(2) 洋 名 : VOGLIBOSE TABLETS

(3) 名称の由来 : 有効成分であるボグリボースに剤形及び含量を記載し、NIPROから「NP」を付した。

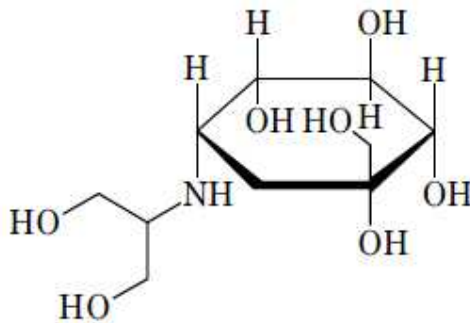
2. 一般名

(1) 和 名 (命名法) : ボグリボース (JAN)

(2) 洋 名 (命名法) : Voglibose (JAN)

(3) ステム : 抗高血糖剤 (スルホンアミド系以外の) : gli

3. 構造式又は示性式



4. 分子式及び分子量

分子式 : $C_{10}H_{21}NO_7$

分子量 : 267.28

5. 化学名 (命名法)

3,4-Dideoxy-4-[2-hydroxy-1-(hydroxymethyl)ethylamino]-2-C-(hydroxymethyl)-D-*epi*-inositol (IUPAC)

6. 慣用名, 別名, 略号, 記号番号

該当資料なし

7. CAS 登録番号

83480-29-9

Ⅲ. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質

(1) 外観・性状

白色の結晶又は結晶性の粉末である。

(2) 溶解性

水に極めて溶けやすく、酢酸(100)に溶けやすく、メタノールに溶けにくく、エタノール(99.5)に極めて溶けにくい。

0.1mol/L 塩酸試薬に溶ける。

(3) 吸湿性²⁾

25℃、75%RH 及び 84%RH の条件下で 7 日間保存したとき、吸湿性は認められなかった。25℃・93%RH の条件下では、7 日間で 7%の吸湿が認められた。

(4) 融点(分解点), 沸点, 凝固点

融点: 163~168℃

(5) 酸塩基解離定数²⁾

pKa=7.06 (イミノ基、25℃)

(6) 分配係数

該当資料なし

(7) その他の主な示性値¹⁾

旋光度: $[\alpha]_D^{20}$: +45~+48° (脱水物に換算したもの 0.2g、0.1mol/L 塩酸試液、20mL、100mm)。

pH: 本品 1.0g を水 10mL に溶かした液の pH は 9.8~10.4 である。

水分: 0.2%以下 (0.5g、電量滴定法)。

強熱残分: 0.1%以下 (1g)。

2. 有効成分の各種条件下における安定性

該当資料なし

3. 有効成分の確認試験法¹⁾

日本薬局方の医薬品各条の「ボグリボース」確認試験法による。

4. 有効成分の定量法¹⁾

日本薬局方の医薬品各条の「ボグリボース」定量法による。

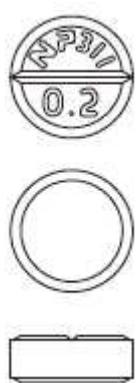
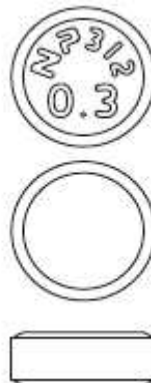
IV. 製剤に関する項目

1. 剤形

(1) 剤形の区別, 外観及び性状

1) 区別：錠剤（素錠）

2) 外観及び性状：下記表に記載

販売名		ボグリボース錠 0.2mg 「NP」	ボグリボース錠 0.3mg 「NP」
外形			
形状		白色の割線入り素錠	白色の素錠
大きさ	直径 (mm)	7.0	8.0
	厚さ (mm)	2.7	3.1
	重量 (mg)	140	210
識別コード		NP-311	NP-312

(2) 製剤の物性：該当資料なし

(3) 識別コード：上記表に記載

(4) pH, 浸透圧比, 粘度, 比重, 無菌の旨及び安定な pH 域等：該当資料なし

2. 製剤の組成

(1) 有効成分（活性成分）の含量

ボグリボース錠 0.2mg 「NP」

1錠中 日本薬局方 ボグリボース 0.2mg

ボグリボース錠 0.3mg 「NP」

1錠中 日本薬局方 ボグリボース 0.3mg

(2) 添加物

乳糖水和物、トウモロコシデンプン、ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸マグネシウム

(3) その他

該当しない

3. 懸濁剤，乳剤の分散性に対する注意

該当しない

4. 製剤の各種条件下における安定性

加速試験

試験条件：40±1℃、75±5%RH

①ボグリボース錠 0.2mg 「NP」³⁾

PTP 包装：包装形態（ポリ塩化ビニル・アルミ箔）

項目及び規格	試験開始時	1 カ月後	3 カ月後	6 カ月後
性状（白色の割線入り素錠）	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	適合	適合	適合
含量（95.0～105.0%）	100.3～ 101.5	99.6～ 101.0	97.6～ 101.5	99.9～ 101.5

(n=3)

②ボグリボース錠 0.3mg 「NP」⁴⁾

PTP 包装：包装形態（ポリ塩化ビニル・アルミ箔）

項目及び規格	試験開始時	1 カ月後	3 カ月後	6 カ月後
性状（白色の素錠）	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	適合	適合	適合
含量（95.0～105.0%）	97.8～ 100.7	99.5～ 100.1	99.0～ 101.0	99.7～ 100.0

(n=3)

長期保存試験

試験条件：25±2℃、60±5%RH

①ボグリボース錠 0.2mg 「NP」⁵⁾

PTP 包装：包装形態（ポリ塩化ビニル・アルミ箔（ポリエチレン・ポリプロピレンラミネートフィルム袋））

項目及び規格	試験開始時	6 カ月後	12 カ月後	24 カ月後	36 カ月後
性状（白色の割線入り素錠）	適合	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	—	—	—	適合
製剤均一性試験	適合	—	—	—	適合
含量（95.0～105.0%）	98.6～ 100.5	98.2～ 98.9	98.4～ 99.7	99.0～ 101.5	97.0～ 97.6

(n=3)

②ボグリボース錠 0.3mg 「NP」⁶⁾

PTP 包装：包装形態（ポリ塩化ビニル・アルミ箔（ポリエチレン・ポリプロピレンラミネートフィルム袋））

項目及び規格	試験開始時	6 カ月後	12 カ月後	24 カ月後	36 カ月後
性状（白色の素錠）	適合	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	—	—	—	適合
製剤均一性試験	適合	—	—	—	適合
含量（95.0～105.0%）	97.6～ 99.0	96.1～ 101.3	95.9～ 98.2	95.8～ 96.6	96.9～ 99.0

(n=3)

最終包装製品を用いた長期保存試験（25℃、相対湿度 60%、3 年間）の結果、通常の市場流通下において 3 年間安定であることが確認された。

無包装状態での安定性

試験項目：性状、硬度、含量

『錠剤・カプセル剤の無包装状態での安定性試験法について（答申）』における評価法および評価基準に従い評価した結果は以下の通りである。

①ボグリボース錠0.2mg 「NP」⁷⁾

保存条件		保存形態	保存期間	結果
温度	75%RH/40℃	遮光	3 カ月	[性状] 白色→極淡い微黄色 (規格外)
湿度	60%RH/25℃	遮光	3 カ月	変化なし
光	約 120 万 lx・hr (60%RH/25℃)	光照射		変化なし

②ボグリボース錠 0.3mg 「NP」⁸⁾

保存条件		保存形態	保存期間	結果
温度	75%RH/40℃	遮光	3 カ月	[性状] 白色→極淡い微黄色 (規格外) [硬度] 6kg→3kg へ低下 (規格内)
湿度	60%RH/25℃	遮光	3 カ月	[硬度] 6kg→3kg へ低下 (規格内)
光	約 120 万 lx・hr (60%RH/25℃)	光照射		[硬度] 6kg→3kg へ低下 (規格内)

5. 調製法及び溶解後の安定性

該当しない

6. 他剤との配合変化（物理化学的变化）

該当資料なし

7. 溶出性

溶出挙動における類似性

①ボグリボース錠0.2mg「NP」⁹⁾

（「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン：平成9年12月22日 医薬審第487号、平成13年5月31日 医薬審発第786号」）

試験方法：日本薬局方一般試験法溶出試験法（パドル法）

試験条件

試験液の温度：37±0.5℃

試験液の量：900mL

試験液：pH1.2＝日本薬局方崩壊試験第1液

pH4.0＝0.025mol/Lクエン酸試液に0.05mol/Lリン酸一水素ナトリウム試液を加えてpHを4.0とする

pH6.8＝日本薬局方崩壊試験第2液

水

試験液の種類：回転数50rpmの場合 pH1.2、4.0、6.8及び水

回転数100rpmの場合 pH4.0

判定基準：試験製剤の平均溶出率を、標準製剤の平均溶出率と比較する。すべての溶出試験条件において、以下のいずれかの基準に適合するとき、同等とする。

標準製剤の平均溶出率が規定された試験時間以内に85%に達する場合

①標準製剤が15分以内に平均85%以上溶出する場合：

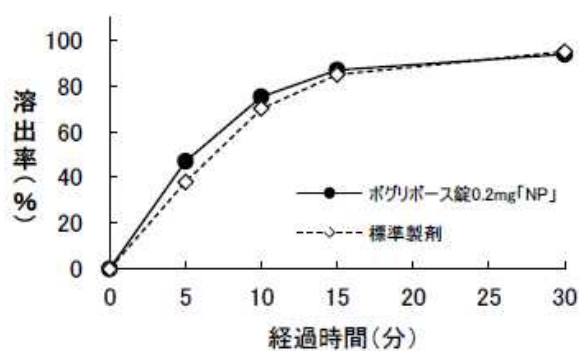
試験製剤は15分以内に平均85%以上溶出する。

②標準製剤が15～30分に平均85%以上溶出する場合：

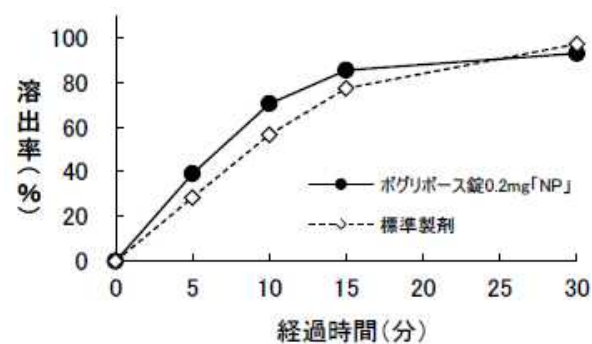
標準製剤の平均溶出率が60%及び85%付近の適当な2時点において、試験製剤の平均溶出率は標準製剤の平均溶出率±15%の範囲にある。

試験結果：同等性試験ガイドラインに従ってボグリボース錠0.2mg「NP」と標準製剤の溶出挙動を比較した。その結果、全ての条件において溶出挙動の類似性の判定条件を満たしていたため、両製剤の溶出挙動は類似していると判断した。

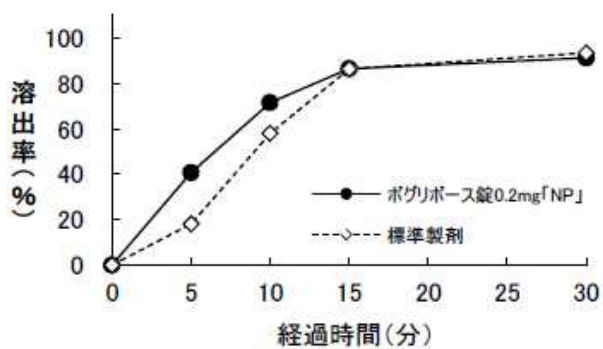
試験液 pH1.2における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



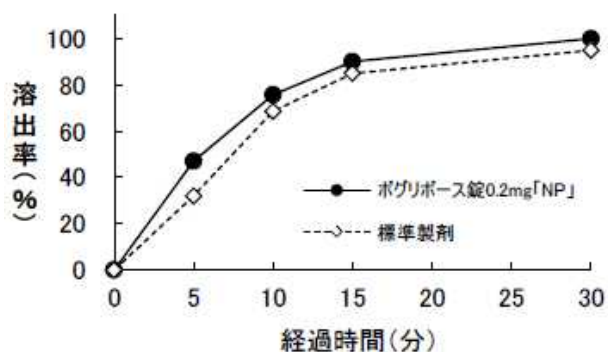
試験液 pH4.0における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



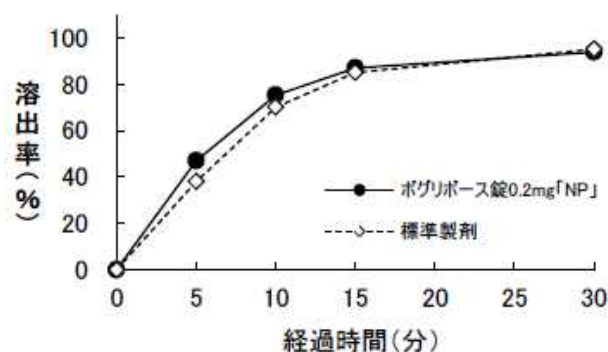
試験液 pH6.8における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



試験液 水における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



試験液 pH4.0 (毎分100回転) における平均溶出曲線 (mean±S.D., n=12)



②ボグリボース錠0.3mg「NP」¹⁰⁾

(「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン:平成9年12月22日 医薬審第487号、平成13年5月31日 医薬審発第786号」)

試験方法: 日本薬局方一般試験法溶出試験法 (パドル法)

試験条件

試験液の温度: $37 \pm 0.5^\circ\text{C}$

試験液の量: 900mL

試験液: pH1.2 = 日本薬局方崩壊試験第1液

pH5.0 = 0.025mol/L クエン酸試液に 0.05mol/L リン酸一水素ナトリウム試液を加えて pH を 5.0 とする

pH6.8 = 日本薬局方崩壊試験第2液
水

試験液の種類: 回転数 50rpm の場合 pH1.2、5.0、6.8 及び水

回転数 100rpm の場合 pH5.0

判定基準: 試験製剤の平均溶出率を、標準製剤の平均溶出率と比較する。すべての溶出試験条件において、以下の基準に適合するとき、同等とする。

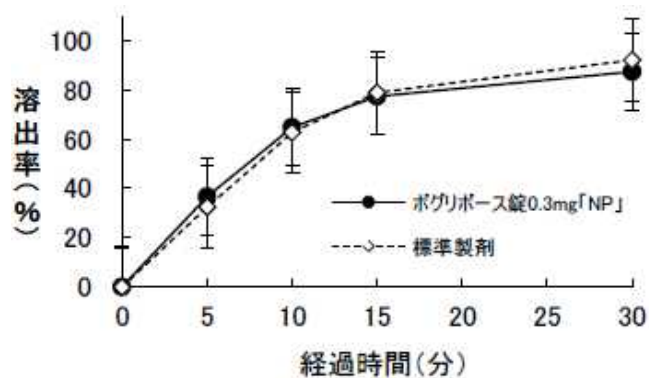
標準製剤の平均溶出率が規定された試験時間以内に 85% に達する場合

標準製剤が 15~30 分に平均 85% 以上溶出する場合:

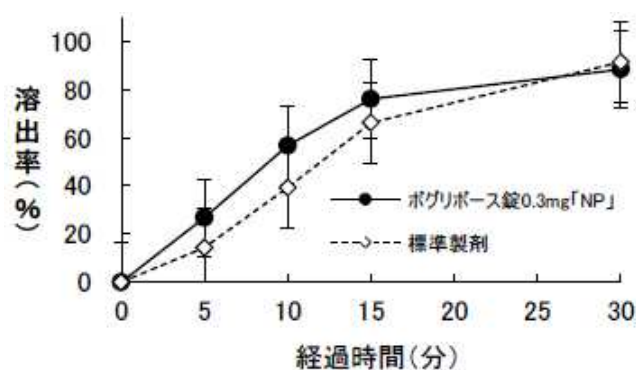
標準製剤の平均溶出率が 60% 及び 85% 付近の適当な 2 時点において、試験製剤の平均溶出率は標準製剤の平均溶出率 $\pm 15\%$ の範囲にある。

試験結果: 同等性試験ガイドラインに従ってボグリボース錠 0.3mg「NP」と標準製剤の溶出挙動を比較した。その結果、全ての条件において溶出挙動の類似性の判定条件を満たしていたため、両製剤の溶出挙動は類似していると判断した。

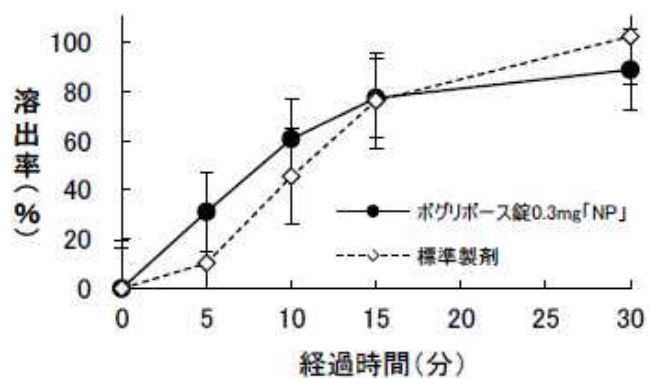
試験液 pH1.2 における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



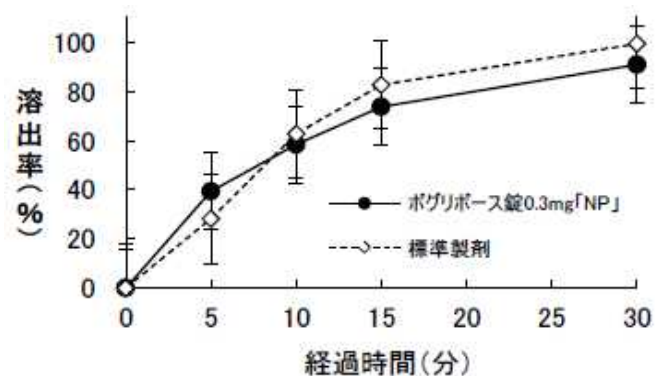
試験液 pH5.0 における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



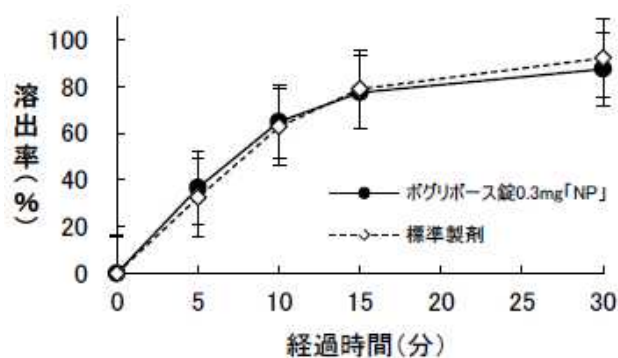
試験液 pH6.8 における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



試験液 水における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



試験液 pH5.0 (毎分 100 回転) における平均溶出曲線 (mean±S. D., n=12)



〈公的溶出規格への適合〉

方法 : 日本薬局方 溶出試験法 (パドル法)

試験液 : 水 900mL

回転数 : 50rpm

試験結果 : 30 分以内に 85%以上溶出した。

ボグリボース錠 0.2mg 「NP」 及びボグリボース錠 0.3mg 「NP」 は日本薬局方医薬品各条に定められたボグリボース錠の溶出規格に適合していることが確認されている。

8. 生物学的試験法

該当しない

9. 製剤中の有効成分の確認試験法¹¹⁾

日本薬局方の医薬品各条の「ボグリボース錠」確認試験法による。

10. 製剤中の有効成分の定量法¹¹⁾

日本薬局方の医薬品各条の「ボグリボース錠」定量法による。

11. 力価

該当しない

12. 混入する可能性のある夾雑物

該当資料なし

13. 注意が必要な容器・外観が特殊な容器に関する情報

該当資料なし

14. その他

該当しない

V. 治療に関する項目

1. 効能又は効果

○糖尿病の食後過血糖の改善

(ただし、食事療法・運動療法を行っている患者で十分な効果が得られない場合、又は食事療法・運動療法に加えて経口血糖降下剤若しくはインスリン製剤を使用している患者で十分な効果が得られない場合に限る)

○耐糖能異常における2型糖尿病の発症抑制(錠0.2mgのみ)

(ただし、食事療法・運動療法を十分に行っても改善されない場合に限る)

〈効能・効果に関連する使用上の注意〉

耐糖能異常における2型糖尿病の発症抑制の場合(錠0.2mgのみ)

本剤の適用は、耐糖能異常(空腹時血糖が126mg/dL未満かつ75g経口ブドウ糖負荷試験の血糖2時間値が140~199mg/dL)と判断され、糖尿病発症抑制の基本である食事療法・運動療法を3~6カ月間行っても改善されず、かつ高血圧症、脂質異常症(高トリグリセリド血症、低HDLコレステロール血症等)、肥満(Body Mass Index: BMI 25kg/m²以上)、2親等以内の糖尿病家族歴のいずれかを有する場合に限定すること。

2. 用法及び用量

○糖尿病の食後過血糖の改善の場合

通常、成人にはボグリボースとして1回0.2mgを1日3回毎食直前に経口投与する。なお、効果不十分な場合には、経過を十分に観察しながら1回量を0.3mgまで増量することができる。

○耐糖能異常における2型糖尿病の発症抑制の場合(錠0.2mgのみ)

通常、成人にはボグリボースとして1回0.2mgを1日3回毎食直前に経口投与する。

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉

耐糖能異常における2型糖尿病の発症抑制の場合(錠0.2mgのみ)

本剤投与中は適切な間隔で血糖管理に関する検査を行い、常に投与継続の必要性に注意すること。(「重要な基本的注意とその理由及び処置方法」の項参照)

3. 臨床成績

(1) 臨床データパッケージ

該当しない

(2) 臨床効果

該当資料なし

(3) 臨床薬理試験

該当資料なし

(4) 探索的試験

該当資料なし

(5) 検証的試験

1) 無作為化並行用量反応試験

該当資料なし

2) 比較試験

該当資料なし

3) 安全性試験

該当資料なし

4) 患者・病態別試験

該当資料なし

(6) 治療的使用

1) 使用成績調査・特定使用成績調査（特別調査）・製造販売後臨床試験（市販後臨床試験）

該当資料なし

2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した試験の概要

該当資料なし

VI. 薬効薬理に関する項目

1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

α -グルコシダーゼ阻害剤

2. 薬理作用

(1) 作用部位・作用機序¹⁾

腸管において、二糖類から単糖類への分解を担う二糖類水解酵素 (α -グルコシダーゼ) を阻害することによって、糖質の消化・吸収を遅延させ、食後過血糖を改善する。

(2) 薬効を裏付ける試験成績

生物学的同等性試験ガイドライン

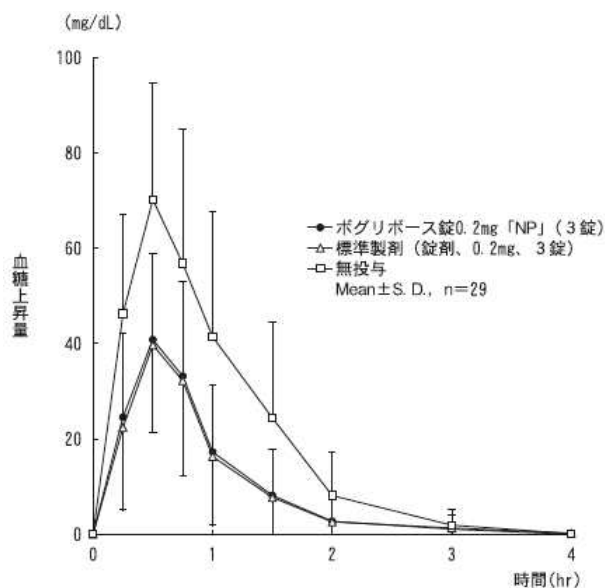
(「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン:平成9年12月22日 医薬審第487号、平成13年5月31日 医薬審発第786号」)

血糖上昇抑制作用

①ボグリボース錠 0.2mg 「NP」⁹⁾

ボグリボース錠 0.2mg 「NP」と標準剤のそれぞれ3錠 (ボグリボースとして0.6mg)^{注1)}を、空腹時に単回経口投与し、無投与群を含む3群 (クロスオーバー法) に対し、糖負荷 (ショ糖 100g を水 150mL に溶かして服用) における血糖値の上昇量を測定した結果、無投与群に比較して両剤とも有意な血糖上昇抑制作用を示した。また、得られた血糖値動態パラメータ ($AUC_{0\rightarrow 4hr}$ 、 C_{max}) について統計解析を行った結果、両剤の生物学的同等性が確認された。

注1)本剤の承認された1回用量はボグリボースとして0.3mgまでである。



	判定パラメータ	
	AUC _{0→4hr} (mg・hr/dL)	Cmax (mg・hr/dL)
ボグリボース錠 0.2mg「NP」(3錠)	36.6±24.3	44.1±17.9
標準製剤(錠剤、0.2mg、3錠)	36.4±25.6	44.4±18.2

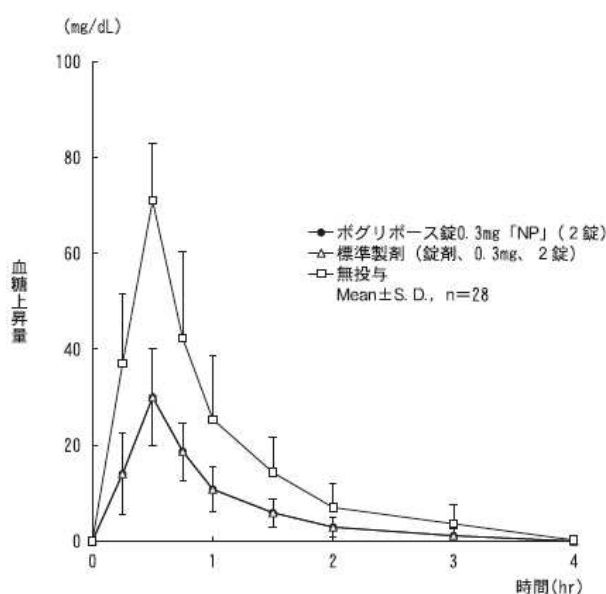
(Mean±S. D., n=29)

血糖上昇量並びに AUC、Cmax 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

②ボグリボース錠 0.3mg「NP」¹⁰⁾

ボグリボース錠 0.3mg「NP」と標準製剤のそれぞれ2錠(ボグリボースとして0.6mg)^{注2)}を、空腹時に単回経口投与し、無投与群を含む3群(クロスオーバー法)に対し、糖負荷(ショ糖100gを水150mLに溶かして服用)における血糖値の上昇量を測定した結果、無投与群に比較して両剤とも有意な血糖上昇抑制作用を示した。また、得られた血糖値動態パラメータ(AUC_{0→4hr}、Cmax)について統計解析を行った結果、両剤の生物学的同等性が確認された。

注2)本剤の承認された1回用量はボグリボースとして0.3mgまでである。



	判定パラメータ	
	AUC _{0→4hr} (mg・hr/dL)	Cmax (mg・hr /dL)
ボグリボース錠 0.3mg「NP」(2錠)	24.6±7.62	29.4±8.90
標準製剤(錠剤、0.3mg、2錠)	24.3±7.67	29.3±9.81

(Mean±S. D., n=28)

血糖上昇量並びに AUC、Cmax 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

(3) 作用発現時間・持続時間

該当資料なし

VII. 薬物動態に関する項目

1. 血中濃度の推移・測定法

(1) 治療上有効な血中濃度

本剤は、経口投与後腸管内で α -グルコシダーゼに作用するので該当しない。

(2) 最高血中濃度到達時間

本剤は、経口投与後腸管内で α -グルコシダーゼに作用するので該当しない。

(3) 臨床試験で確認された血中濃度

本剤は、経口投与後腸管内で α -グルコシダーゼに作用するので該当しない。

(4) 中毒域

該当資料なし

(5) 食事・併用薬の影響

該当資料なし

(6) 母集団（ポピュレーション）解析により判明した薬物体内動態変動要因

該当資料なし

2. 薬物速度論的パラメータ

(1) 解析方法

該当資料なし

(2) 吸収速度定数

該当資料なし

(3) バイオアベイラビリティ

該当資料なし

(4) 消失速度定数

該当資料なし

(5) クリアランス

該当資料なし

(6) 分布容積

該当資料なし

(7) 血漿蛋白結合率

該当資料なし

3. 吸収

該当資料なし

4. 分布

- (1) 血液－脳関門通過性
該当資料なし
- (2) 血液－胎盤関門通過性
該当資料なし
- (3) 乳汁への移行性
該当資料なし
- (4) 髄液への移行性
該当資料なし
- (5) その他の組織への移行性
該当資料なし

5. 代謝

- (1) 代謝部位及び代謝経路
該当資料なし
- (2) 代謝に関与する酵素（CYP450 等）の分子種
該当資料なし
- (3) 初回通過効果の有無及びその割合
該当資料なし
- (4) 代謝物の活性の有無及び比率
該当資料なし
- (5) 活性代謝物の速度論的パラメータ
該当資料なし

6. 排泄

- (1) 排泄部位及び経路¹⁾
主にふん便中に排泄される。
- (2) 排泄率
該当資料なし
- (3) 排泄速度
該当資料なし

7. トランスポーターに関する情報

該当資料なし

8. 透析等による除去率

該当資料なし

Ⅷ. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

1. 警告内容とその理由

該当しない

2. 禁忌内容とその理由（原則禁忌を含む）

禁忌（次の患者には投与しないこと）

1. 重症ケトーシス、糖尿病性昏睡又は前昏睡の患者 [輸液及びインスリンによる速やかな高血糖の是正が必須となるので本剤の投与は適さない。]
2. 重症感染症、手術前後、重篤な外傷のある患者 [インスリン注射による血糖管理が望まれるので本剤の投与は適さない。]
3. 本剤の成分に対する過敏症の既往歴のある患者

3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由

「Ⅴ. 治療に関する項目」を参照すること。

4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由

「Ⅴ. 治療に関する項目」を参照すること。

5. 慎重投与内容とその理由

慎重投与（次の患者には慎重に投与すること）

- 1) 他の糖尿病用薬を投与中の患者 [低血糖が起こることがある。]（「副作用(2)重大な副作用と初期症状」の項参照）
- 2) 開腹手術の既往又は腸閉塞の既往のある患者 [腸内ガス等の増加により腸閉塞が発現しやすい。]
- 3) 消化・吸収障害を伴った慢性腸疾患の患者 [本剤の作用により病態が悪化することがある。]
- 4) ロエムヘルド症候群、重度のヘルニア、大腸の狭窄・潰瘍等の患者 [腸内ガス等の増加により症状が悪化することがある。]
- 5) 重篤な肝障害のある患者 [代謝状態が変化することがあるため血糖管理状況が大きく変化のおそれがある。また、重篤な肝硬変例で、高アンモニア血症が増悪し意識障害を伴うことがある。]
- 6) 重篤な腎障害のある患者 [代謝状態が変化することがあるため血糖管理状況が大きく変化のおそれがある。]
- 7) 高齢者（「高齢者への投与」の項参照）

6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法

重要な基本的注意

●全効能共通

- 1) 糖尿病の診断が確立した患者又は耐糖能異常を有する者に対してのみ適用を考慮すること。これら以外にも尿糖陽性等の類似症状を呈する疾患（腎性糖尿、老人性糖代謝異常、甲状腺機能異常、慢性膵炎等の膵臓疾患、薬剤起因性の耐糖能異常等）があることに留意すること。
- 2) 本剤の適用はあらかじめ糖尿病治療及び糖尿病発症抑制の基本である食事療法、運動療法を十分に行ったうえで効果が不十分な場合に限り考慮すること。
- 3) 本剤は低血糖症状を起こすことがあるので、糖尿病患者又は耐糖能異常を有する者に対し低血糖症状及びその対処方法について十分説明すること。また、高所作業、自動車の運転等に従事している糖尿病患者又は耐糖能異常を有する者に投与するときには注意すること。（「副作用(2)重大な副作用と初期症状」の項参照）

○糖尿病の食後過血糖の改善の場合

- 1) 糖尿病治療の基本である食事療法・運動療法のみを行っている患者では、投与の際の食後血糖 2 時間値は 200mg/dL 以上を示す場合に限る。
- 2) 食事療法、運動療法に加えて経口血糖降下剤又はインスリン製剤を使用している患者では、投与の際の空腹時血糖値は 140mg/dL 以上を目安とする。
- 3) 本剤投与中は、血糖を定期的に検査するとともに、経過を十分に観察し、常に投与継続の必要性について注意を払うこと。本剤を 2～3 カ月投与しても食後血糖に対する効果が不十分な場合（静脈血漿で食後血糖 2 時間値が 200mg/dL 以下にコントロールできないなど）には、より適切と考えられる治療への変更を考慮すること。

なお、食後血糖の十分なコントロール（静脈血漿で食後血糖 2 時間値が 160mg/dL 以下）が得られ、食事療法・運動療法又はこれらに加えて経口血糖降下剤若しくはインスリンを使用するのみで十分と判断される場合には、本剤の投与を中止して経過観察を行うこと。

○耐糖能異常における 2 型糖尿病の発症抑制の場合

本剤の投与開始後は、1～3 カ月ごとを目安に空腹時血糖、随時血糖、HbA1c 等の糖代謝関連検査及び体重測定を実施するとともに、6～12 カ月ごとを目安に 75g 経口ブドウ糖負荷試験を実施して十分に経過観察し、常に投与継続の必要性に留意すること。また、血糖高値（空腹時血糖、75g 経口ブドウ糖負荷試験の血糖 2 時間値）や糖負荷後初期インスリン分泌低下等を有する場合には、糖尿病発症リスクが高くなるとの報告があるので、十分な観察を行うこと。

なお、2 型糖尿病と診断された場合には、適切と考えられる治療への変更を考慮すること。また、本剤投与開始後に耐糖能異常が改善し、食事療法・運動療法のみで十分と判断される場合には、本剤の投与を中止して糖代謝関連検査等による経過観察を行うこと。

7. 相互作用

(1) 併用禁忌とその理由

該当しない

(2) 併用注意とその理由

併用注意（併用に注意すること）	
薬剤名等	臨床症状・措置方法・機序等
糖尿病用薬 ・スルホニルアミド系及びスルホニルウレア系薬剤 ・ビグアナイド系薬剤 ・インスリン製剤 ・インスリン抵抗性改善剤	インスリン及びスルホニルウレア系薬剤と併用した際に、低血糖発現の報告があるので、左記薬剤との併用時には、低血糖発現の可能性を考慮し、低用量から投与を開始するなど慎重に投与すること。
糖尿病用薬及びその血糖降下作用を増強又は減弱する薬剤を併用している場合 糖尿病用薬の血糖降下作用を増強する薬剤 ・β遮断剤 ・サリチル酸剤 ・モノアミン酸化酵素阻害剤（MAO阻害剤） ・フィブラート系の高脂血症治療剤 ・ワルファリン 等 糖尿病用薬の血糖降下作用を減弱する薬剤 ・アドレナリン ・副腎皮質ホルモン ・甲状腺ホルモン 等	左記の併用に加え更に本剤を併用する場合には、糖尿病用薬の使用上の注意に記載の相互作用に留意するとともに、本剤の糖質吸収遅延作用が加わることによる影響に十分注意すること。

8. 副作用

(1) 副作用の概要

本剤は、副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

(2) 重大な副作用と初期症状

重大な副作用（頻度不明）

(1) 低血糖

他の糖尿病用薬との併用で**低血糖**があらわれることがある。また、他の糖尿病用薬を併用しない場合でも**低血糖**が報告されている。本剤は二糖類の消化・吸収を遅延するので、低血糖症状が認められた場合にはショ糖ではなくブドウ糖を投与するなど適切な処置を行うこと。

(2) 腸閉塞

腹部膨満、鼓腸、放屁増加等があらわれ、腸内ガス等の増加により、**腸閉塞**があらわれることがあるので、観察を十分に行い、持続する腹痛、

嘔吐等の症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(3) 劇症肝炎、重篤な肝機能障害、黄疸

劇症肝炎、AST (GOT)、ALT (GPT) の上昇等を伴う**重篤な肝機能障害、黄疸**があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(4) 意識障害

重篤な肝硬変例に投与した場合、便秘等を契機として**高アンモニア血症**が増悪し、**意識障害**を伴うことがあるので、排便状況等を十分に観察し、異常が認められた場合には直ちに投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

(3) その他の副作用

種類\頻度	頻度不明
消化器	下痢、放屁、腹部膨満、軟便、腹鳴、腹痛、便秘、食欲不振、悪心、嘔吐、胸やけ、口渇、口内炎、味覚異常、腸管嚢胞様気腫症
過敏症 ^{注3)}	発疹、そう痒、光線過敏症
肝臓	AST (GOT)、ALT (GPT)、LDH、 γ -GTP、Al-P の上昇
精神神経系	めまい、頭痛、ふらつき、眠気
血液	貧血、血小板減少、顆粒球減少
その他	しびれ、顔面等の浮腫、眼のかすみ、ほてり、倦怠感、脱力感、高カリウム血症、血清アミラーゼ上昇、HDL コレステロール低下、発汗、脱毛

注3)このような場合には投与を中止すること。

(4) 項目別副作用発現頻度及び臨床検査値異常一覧

該当資料なし

(5) 基礎疾患、合併症、重症度及び手術の有無等背景別の副作用発現頻度

該当資料なし

(6) 薬物アレルギーに対する注意及び試験法

「2. 禁忌内容とその理由（原則禁忌を含む）」の項

「8. 副作用」の項 を参照。

9. 高齢者への投与

一般に高齢者では生理機能が低下しているので、低用量（例えば 1 回量 0.1mg）から投与を開始するとともに、血糖値及び消化器症状の発現に留意するなど、経過を十分に観察しながら慎重に投与すること。

10. 妊婦，産婦，授乳婦等への投与

- 1) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。[妊娠中の投与に関する安全性は確立していない。]
- 2) 授乳中の婦人への投与は避けることが望ましいが、やむを得ず投与する場合は、授乳を避けさせること。[動物試験（ラット）で、母動物の糖質吸収の抑制に起因する乳汁産生の抑制によると考えられる出生児の体重の増加抑制が認められている。]

11. 小児等への投与

小児に対する安全性は確立していない（使用経験がない）。

12. 臨床検査結果に及ぼす影響

該当資料なし

13. 過量投与

該当資料なし

14. 適用上の注意

薬剤交付時

PTP 包装の薬剤は、PTP シートから取り出して服用するよう指導すること。[PTP シートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔を起こして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている。]

15. その他の注意

該当しない

16. その他

【取扱い上の注意】

湿気を避けて保存すること。

Ⅹ. 非臨床試験に関する項目

1. 薬理試験

- (1) 薬効薬理試験（「Ⅵ. 薬効薬理に関する項目」参照）
- (2) 副次的薬理試験
該当資料なし
- (3) 安全性薬理試験
該当資料なし
- (4) その他の薬理試験
該当資料なし

2. 毒性試験

- (1) 単回投与毒性試験
該当資料なし
- (2) 反復投与毒性試験
該当資料なし
- (3) 生殖発生毒性試験
該当資料なし
- (4) その他の特殊毒性
該当資料なし

X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分

製 剤：ボグリボース錠 0.2mg 「NP」 処方箋医薬品^{注4)}
ボグリボース錠 0.3mg 「NP」 処方箋医薬品^{注4)}
有効成分：日本薬局方 ボグリボース 処方箋医薬品^{注4)}
注4) 注意－医師等の処方箋により使用すること

2. 有効期間又は使用期限

使用期限：製造後3年（安定性試験結果に基づく）
（「IV. 製剤に関する項目」の「4. 製剤の各種条件下における安定性」の項を参照。）

3. 貯法・保存条件

室温保存

4. 薬剤取扱い上の注意点

（1）薬局での取り扱い上の留意点について

該当しない

（2）薬剤交付時の取扱いについて（患者等に留意すべき必須事項等）

「VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目」の「6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法」及び「14. 適用上の注意」の項を参照。

【取扱い上の注意】

湿気を避けて保存すること。

（3）調剤時の留意点について

該当しない

5. 承認条件等

該当しない

6. 包装

ボグリボース錠 0.2mg 「NP」： 100錠（PTP）

ボグリボース錠 0.3mg 「NP」： 100錠（PTP）

7. 容器の材質

ポリ塩化ビニル、アルミ箔

8. 同一成分・同効薬

同一成分薬：ベイスン錠 0.2、同錠 0.3、同 OD 錠 0.2、同 OD 錠 0.3（武田テバ薬品=
武田薬品工業） 他

同 効 薬：アカルボース、ミグリトール 等

9. 国際誕生年月日

該当しない

10. 製造販売承認年月日及び承認番号

製造承認年月日：2006 年 3 月 15 日

承認番号：ボグリボース錠 0.2mg 「NP」：21800AMZ10265000

ボグリボース錠 0.3mg 「NP」：21800AMZ10266000

[注]2014 年 2 月 28 日に製造販売を承継

11. 薬価基準収載年月日

2006 年 7 月 7 日

12. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容

○「効能又は効果」、「用法及び用量」の追加

一部変更承認年月日：2014 年 10 月 27 日

〈効能・効果〉「耐糖能異常における 2 型糖尿病の発症抑制（錠 0.2mg のみ）

（ただし、食事療法・運動療法を十分に行っても改善されない場合に
限る）」を追記する。

〈用法・用量〉「耐糖能異常における 2 型糖尿病の発症抑制の場合（錠 0.2mg のみ）

通常、成人にはボグリボースとして 1 回 0.2mg を 1 日 3 回毎食直
前に経口投与する。」を追記する。

13. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容

該当しない

14. 再審査期間

該当しない

15. 投薬期間制限医薬品に関する情報

本剤は、投薬（あるいは投与）期間に関する制限は定められていない。

16. 各種コード

販売名	HOT (9桁) 番号	厚生労働省薬価基準 収載医薬品コード (YJコード)	レセプト 電算コード
ボグリボース錠 0.2mg 「NP」	117517201	3969004F1012 (3969004F1187)	620004072
ボグリボース錠 0.3mg 「NP」	117519601	3969004F2019 (3969004F2183)	620004074

17. 保険給付上の注意

本剤は、診療報酬上の後発医薬品に該当する。

耐糖能異常における2型糖尿病の発症抑制（ただし、食事療法及び運動療法を十分に行っても改善されない場合に限る。）を目的に使用する場合、保険適用上の取扱いを以下のとおりとすること。

1. 耐糖能異常（空腹時血糖が126mg/dL未満かつ75g経口ブドウ糖負荷試験の血糖2時間値が140～199mg/dL）と判断され、糖尿病発症抑制の基本である食事療法及び運動療法を3～6カ月間行っても改善されず、かつ高血圧症、脂質異常症（高トリグリセリド血症、低HDLコレステロール血症等）のいずれかを基礎疾患として有する患者を対象とする場合に限り、保険適用されるものとする。
2. 診療報酬明細書の摘要欄には、耐糖能異常と判断した根拠（判断した年月日とその結果）、食事療法及び運動療法を3～6カ月間行っても改善されなかった旨及び高血圧症又は脂質異常症の診断名を記載する。

X I. 文献

1. 引用文献

- 1) 第十七改正 日本薬局方 解説書(廣川書店) C-5141(2016)
- 2) 日本薬剤師研修センター編：日本薬局方 医薬品情報 2016 (じほう) 707(2016)
- 3) ニプロ(株)社内資料：安定性 (加速) 試験
- 4) ニプロ(株)社内資料：安定性 (加速) 試験
- 5) ニプロ(株)社内資料：安定性 (長期保存) 試験
- 6) ニプロ(株)社内資料：安定性 (長期保存) 試験
- 7) ニプロ(株)社内資料：安定性 (無包装状態での安定性) 試験
- 8) ニプロ(株)社内資料：安定性 (無包装状態での安定性) 試験
- 9) ニプロ(株)社内資料：生物学的同等性 (溶出、薬力学的) 試験
- 10) ニプロ(株)社内資料：生物学的同等性 (溶出、薬力学的) 試験
- 11) 第十七改正 日本薬局方 解説書(廣川書店) C-5146(2016)
- 12) ニプロ(株)社内資料：安定性 (粉碎後の安定性) 試験
- 13) ニプロ(株)社内資料：安定性 (粉碎後の安定性) 試験
- 14) ニプロ(株)社内資料：簡易懸濁法試験
- 15) ニプロ(株)社内資料：簡易懸濁法試験

2. その他の参考文献

該当資料なし

XII. 参考資料

1. 主な外国での発売状況

該当しない

2. 海外における臨床支援情報

該当資料なし

XIII. 備考

1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報

本項の情報に関する注意

本項には承認を受けていない品質に関する情報が含まれる。試験方法等が確立していない内容も含まれており、あくまでも記載されている試験方法で得られた結果を事実として提示している。医療従事者が臨床適用を検討する上での参考情報であり、加工等の可否を示すものではない。

(掲載根拠:「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドラインに関する Q&A について(その3)」令和元年9月6日付 厚生労働省医薬・生活衛生局 監視指導・麻薬対策課 事務連絡)

(1) 粉砕

粉砕後の安定性

試験項目: 性状、含量 残存率 (%)

①ボグリボース錠 0.2mg 「NP」¹²⁾

保存条件 保存形態	試験項目	開始時	120 万 1x・hr
約 120 万 1x・hr (60%RH/25℃) 光照射	性状	白色の粉末	変化なし
	含量 残存率 (%)	100.0	97.7

②ボグリボース錠 0.3mg 「NP」¹³⁾

保存条件 保存形態	試験項目	開始時	120 万 1x・hr
約 120 万 1x・hr (60%RH/25℃) 光照射	性状	白色の粉末	変化なし
	含量 残存率 (%)	100.0	101.1

(2) 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通過性

試験方法:

①崩壊懸濁試験

シリンジのプランジャーを抜き取り、シリンジ内に錠剤 1 個を入れてプランジャーを戻し、シリンジに温湯 (55℃) 20 mL を吸い取り、筒先の蓋をして 5 分間自然放置した。5 分後にシリンジを手で 90 度 15 往復横転し、崩壊・懸濁の状況を観察した。5 分後に崩壊しない場合は、更に 5 分間放置後、同様の操作を行う。10 分間放置しても崩壊・懸濁しない場合、この方法を中止する。この中止した薬品のうち、粉砕可能な錠剤はコーティング破壊をしてから、開封可能なカプセル剤は開封して充填薬をシリンジ内

に入れて同様に実験を行う。コーティング破壊はシートの上から錠剤を乳棒で数回叩いて行う。

②通過性試験

崩壊懸濁試験で得られた懸濁液を経管栄養チューブ（8Fr.）に、約 2～3mL/sec.の速度で注入し、通過性を観察した。懸濁液を注入後に適量の水を同じ注入器で吸い取り、注入してチューブ内を洗うとき、注入器及びチューブ内に薬が残存していなければ、通過性に問題なしとした。

試験条件：

【水（55℃）】

錠剤 1 個を温湯（55℃）20 mL に入れ、5 分間自然放置後に攪拌したときの崩壊状況を確認した。

5 分後に崩壊しない場合は、更に 5 分間放置後に同様の操作を行い、崩壊状況を確認した。

○：完全崩壊。

△：時間をかければ完全崩壊しそうな状況、またはコーティング残留等によりチューブを閉塞する危険性がある。

×：投与困難。

試験結果

①ボグリボース錠 0.2mg 「NP」¹⁴⁾

試験条件	崩壊懸濁試験		通過性試験
	時間	外観	通過サイズ
水（55℃）	5 分	○	8 Fr.
	10 分		

②ボグリボース錠 0.3mg 「NP」¹⁵⁾

試験条件	崩壊懸濁試験		通過性試験
	時間	外観	通過サイズ
水（55℃）	5 分	○	8 Fr.
	10 分		

2. その他の関連資料

該当資料なし

ニフ.〇株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号